

2015年5月10日 召天者記念礼拝メッセージ

聖書：申命記 34 章 1～8 節

説教：ふるさとを仰ぎ見て

仏教とキリスト教

仏教では、例えば三回忌や七回忌、長いものになれば三十三回忌などと言って決められた年ごとに、先祖の供養をするならわしになっているそうです。キリスト教では特にそのようなことはありませんので、ときどき言われることがあります。「キリスト教は先祖を大事にしないのですか。」仏教に比べて何もしないように見えますから、そう思われるのも無理はありません。

そもそも供養をどうしてするのでしょうか。そうしなければ、死んだ者の罪がそのまま残ってしまい、成仏できない、極楽浄土に行かれない、そんな考え方があるのだそうです。私たちは子どもの時から、人に迷惑をかけないようにしなさいと言われて育ってきました。けれども死んだ後はそうはいきません。生き残った方々に追善法要を営んでいただき、罪滅ぼしをしていただかなければ地獄に落ちてしまうわけです。なので亡くなった方のためにせつせと供養をしならない。大変な迷惑をかけてしまいます。

キリスト教ではどうなのか。罪を滅ぼさなければ天国に行くことはできない。そういう点では仏教とまったく同じです。しかし、大きく違うところもあります。仏教では生き残った者ががんばれば、死んだ者のために罪滅ぼしができると考えます。けれどもキリスト教では、たとえどんなに偉い人であろうが牧師であろうが罪を滅ぼすことはできない。どんなに高いお布施を包もうが、どんなにすばらしいお供え物をしようが、絶対に罪を滅

ぼすことはできないと言います。そうしますと、このままでは誰ひとり天国に行くことはできないということになります。

もちろんそれでは困りますので、神は一つの道を備えてくださいました。そのことを聖書から見て参ります。

1 主がモーセに語ったこと

1) 生涯

モーセは百二十歳で波瀾万丈に富んだ生涯を閉じました。彼はもともとイスラエル人でしたが、親たちがエジプトに移民としたという事情があつてエジプトで生まれております。今もヨーロッパでは移民のことが問題になっていますが、三千五百年前のエジプトも同じです。元から住んでいるエジプト人と移り住んできたイスラエル人との間に摩擦が起きます。だんだんと締め付けが厳しくなり、あるときとうとうエジプトの王から、「イスラエル人に男の子が生まれたら全部殺せ」という命令が出されました。モーセが生まれたのはちょうどその時。親は生まれたばかりのモーセを隠して育てようとするのですが、だんだん難しくなる。とうとうある日、モーセを小さなかごに入れてナイル川に流さなければならなくなります。そこへたまたま川に水遊びに来ていたパロの娘に拾い上げられ、エジプトの王子という立場で育てられました。そのまま順調にいったのかというところではない。四十歳の時に彼は殺人事件を起こしてしまうのです。外国にいた親戚の元に転がり込み、四十年間羊飼いの生活をする。

そして八十歳になったとき、神からエジプトで大変苦しんでいるイスラエル人を救い出すようにとの命令を受け、エジプトに戻ります。その間いろいろなことがあったのですが、とにかくモーセは民たちを率いて自分たちの故郷であるカナンと呼ばれるところを目指して四十年間旅を続けてきました。

2) あなたに見せた

苦しい旅も終わりに近づきました。今その目的地が目の前に見えています。1節の前半を読みます。「モーセはモアブの草原からネボ山、エリコに向かい合わせのピスガの頂に登った。」このあといろいろな地名や町の名前が出て来ます。ことばだけではイメージできないので、週報に地図を載せました。モーセはピスガの頂に登り、北はダンと呼ばれる町から南はツォアルという町まで、そして西は地中海まで見渡しました。これが四十年間目指してきた自分たちの故郷です。彼は高齢にはなっていました、目ははっきりしていましたが、夢にまで見てきた自分たちの故郷を一望に見渡しながら、喜ばない人はいないでしょう。涙を流しながらこれまでの四十年間の苦勞を思い起こしたのだらうと思うのです。

3) そこへ渡って行くことはできない

ところが主は、そんなモーセに4節でこう告げるのです。「わたしが、アブラハム、イサク、ヤコブに、『あなたの子孫に与えよう』と言って誓った地はこれである。わたしはこれをあなたの目に見せたが、あなたはそこへ渡って行くことはできない。」

モーセがイスラエルの民たちを救うため

にエジプトに戻ったときから、ずっと試練の連続でした。それでも、なんとかここまで続けて来られたのは、ひとつの目的があったからでした。必ず自分たちの故郷に戻る。だからやってこられた。やっと今、その目的地を自分の目で見えています。ところが、主は「あなたはそこへ渡って行くことはできない」と言うのです。ごちそうを目の前に並べ、おいしそうな匂いもしてきました。はしを手にとって、さあこれからいただくぞと思っていたら、突然に食べてはいけないと言われて、ごちそうを取り上げられたようなものです。こんなひどい話はありません。なぜこんなことをするのでしょうか。

2 天の故郷を仰ぎ見る

1) 地上の故郷

個人的なことになりますが、私が生まれ育ったのは岩手の田舎です。以前は故郷に戻ることも考えたこともありましたが、しかし、生きていく年数が長くなると、人の心の醜さが見えたり、自分自身も人を傷つけていたということがわかるようになりました。加えて親しい家族が亡くなっていくと、人と人との結びつきはなくなっていきます。そうすると、そこはもう自分にとって理想のふるさとではなくなっていきました。

モーセの時代は、神が約束してくださったカナンの地こそ自分たちの故郷だと信じられました。けれども、今私たちには地上の故郷などありそうもありません。私たちはいつたいどこを目指せばよいのでしょうか。

2) 天の故郷、神の国

ヘブル書11章13節にこうあります。「これらの人々はみな、信仰の人々として死にま

した。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるかにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり寄留者であることを告白していたのです。」

地上で生きている間、神が約束してくださった天の故郷に入ることはありません。けれども、目には見えないけれども、確かに約束された天の故郷が目の前にあるのだと信じて、生涯をまっとうしていった。それが私たちの大先輩たちでした。私たちもまた、大先輩たちをみならい、天の故郷にあこがれながら地上を旅人して歩んでいる訳です。

モーセが約束の地を目前にしたとき、主が「あなたはそこへ渡って行くことはできない」と言われたのは、決して意地悪しようということではありません。神はさらにすぐれたものを用意してくださっていたのです。モーセが渡って行くのは、地上のふるさとではなく、もっとすぐれたところ、天の故郷、天の御国である。主はそう語ってくださっていたのです。

3) 十字架において

では、どのようにしたら天の御国に入ることができるのでしょうか。仏教では生きている者が死んだ者のために供養をし、罪滅ぼしをしなければ極楽浄土に入ることができないと教えています。

キリスト教はどうなのでしょう。天の御国に入るためには罪滅ぼしが必要です。その点では仏教を同じ考え方です。問題は、では誰が罪滅ぼしをするのですか。最初に申し上げたとおりに、誰ひとり罪滅ぼしができる人はいません。私たちの背負っている罪はあまりにも大きすぎるのです。罪はそれほどひどいものなのです。ではどうしたら良いのでしょ

う。

モーセの時代からおよそ千五百年経ったとき、今から二千年前ですが、イエス・キリストという方が私たちのところに来られ、このように言われました。「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」(マタイ 4 章 17 節)

天の御国に入るために、だれかが供養したり、何かをして罪滅ぼしをするのではありません。そんなことをしてもとても天の御国には入れません。することはただ一つです。「悔い改めなさい。」それが天の御国に入ることのたった一つの条件です。私はひどい人間です。私は心の中で何人も人殺しをしています。私はしてはいけないことをしています。私はねたんでいます。ほかの人が持っているものを欲しがっています。そのように告白することが、悔い改めです。ただその告白だけで天の御国に入ることができると言うのです。

あまりにも簡単すぎると言うのでしょうか。でもある方には最も難しいことかもしれません。「私は何も悪くはない。すべての責任はほかの人にある。」自分が悪いなどと認めたくない人がいます。けれどもいつか人は死ぬのです。死が目の前に迫ったとき、心にしまっていた秘密が神から問われるかもしれません。

でも、罪を告白しただけでどうして罪が赦されるのでしょうか。罪は誰が滅ぼしてくださるのですか。イエス・キリストです。神のひとり子が私たちに代わってさばきをお受けになりました。神が十字架で苦しみを味わい、神がご自分のいのちを捨ててくださいました。

私たちの大先輩たちは、イエス・キリストの十字架を信じ、十字架の向こうに約束の天

の故郷があることを確信し、地上の生涯を
まっとうしていきました。私たちがきょうこ
こに集まっているのは、仏教の追善法要とは
違います。死んだ者のために供養するために
集まっているではありません。むしろ、先
に亡くなった大先輩たちが雲のように私た
ちを取り巻き、私たちを励ましてくれている。
亡くなった方々の信仰のことを思い起こす
ためにここにいます。

ともに手を携えながら、約束の地を目指し
て歩んでまいります。